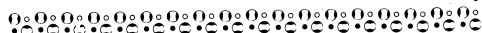


心にのこること



渡辺 富子



Hとの初めての出会いは、今から十五年
前、Hが五年生の時だった。

前担任との引き継ぎには「問題の多い子」と書き添えてあった。そのころのHは、学習に対する意欲もなく、自分の意にそわないとすぐに暴力をふるうことが多く、友達からも孤立していたということだった。

そんなHをなんとか私の手に掌握したいと種々試みたが、いつも私との間に距離を置き、「フン。くだらない。」といった変に大人びた態度で心を閉ざうとはしなかった。

私は、家庭の協力を得ようと家庭訪問もしたが、酒好きで、いつも酒の臭いがたえない父親。また働くことでせいっぱいの母親では、若い私の話に

耳を傾けてくれるはずはなかった。

そのころ、私は、子供たちとのふれ合いを深めるために、放課後の時間は常に何人かの子供を残し、話し合いをしていた。

そんな一学期のある日、Hは、また友達に暴力をふるった。私は、そんなHが心配になり、放課後残るようにいつけ、教室で仕事をしていた。Hは私に反抗を示すそぶりであったが、頓着せず仕事を続けていた。そんな私のそばに来て「どうせオレが悪いんだ。前の先生もそうだった。きつと、先生もそう思っているにちがいない。」とつぶやいた。

その瞬間、私は、ギクツとした。あの種の先入感により、この子を一つの

枠にはめてみていたにちがいないという考えが、私の脳裏を走った。

私は、次のように話しかけた。

「うちにもHという子がいる。丈夫ですなおな子に育てようと思ひ、つけた名前だから、君を呼ぶたびに、うちの子をおもいだす。また、スポーツ万能の君のように育ってほしいと思う。

もし、君を悪い子だと思っているとしたら、君の席を、一番目の届きにくいところには決めないよ。君を級のリーダーとして信用もし、頼りにもしているからこそ、今の席に決めたんだ。自分で悪い子だと思うなら、先生の目の届く場所に席がえするんだね。」と。

そんなことがあってから、Hの態度に少しずつだが変化がみられるように



子供とともに

なった。

調子にのり、はめをはずした行動のあとには、私が何もいわないうちに、「大丈夫。もうやらないから。」などと自分から反省もするようになり、スポーツでは、級の中心となり、積極的に活動するようになった。

卒業も間近いある夕方、裏口によつぱらいているとのことなので、外に出てみると、そこにHの父親が立っていた。驚く私に、「ちよつと先生の顔がみたくなったもんで。Hもおかげさまで卒業できそうです。商売ものですが。」と新聞紙につつんだ卵を持参してくれた。今まで一度も学校に顔を出してくれなかった父親が：そう思うと、Hのためにもうれしくなった。

Hが、高校に進学した。夏の午後、一台のトラックが玄関前に止まり、助手席から、「今、アルバイトをしているの。暑くてたまらないから、冷たい水を飲まして。」とまっ黒く日焼けしたHが顔を見せた。そんなHをみて、思わず涙ぐんでしまった。

「先生。ぼくは大丈夫だよ。」とこり手をふりながら去って行ったH。あれから十年。時々私を訪ねてくれる社会人のHに接するたびに、どんな問題を持つ子供も、何らかのよい点を持っていると思われる。教師は、それらをは握し善導し、温かい心で接してやるのが、いかに重要であるかを、しみじみと感じられるこのごろである。

(保原町立保原小学校教諭)